



法華經  
第四  
下



四

特別  
13  
4203  
12



旬廿七 後方いも 甚れ知

いかにあて

後 枝 吹 枝

昭和八年四月三日  
神保五彌氏贈

58 2846

花情 春告鳥卷之十二

江戸 爲永春水著

第廿三章



花情 春告鳥 卷之十二  
江戸 爲永春水著  
第廿三章  
此の巻は、春の鳥の音の記述に、  
梅の木づから、鶯の音の記述に、  
そのほか、鶯の音の記述に、  
下左の巻を引く、大傳の平な、  
引せらる、凡そ、一、奇、妙、な、  
一、奇、妙、な、



















お茶えんが引小る極まらうがわつちやア私どももまた悔し  
ごころのすけ殊よ今お茶えんが誰や梅田えんの王を  
と終つてごらやアごころの中せんうとくく多先くく  
までも破れしくそまらうを極と流しつけるごころ  
ごころのやせんう 一たこれハ並の極念をする  
お茶えんも中へたあうくあるまごころ 何極てもあけれ  
ども行むの梅田えんの氣がそまらう日あやうやく 松の  
お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが せんが  
お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが

お茶えん

お茶えん

お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが せんが  
お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが せんが  
お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが せんが  
お茶えん せんが せんが せんが せんが せんが せんが

第廿四章

抱しめく 胸念のまらうを 抱しめく 胸念のまらうを  
誰とよまらう 明の誰とよまらう 明の誰とよまらう  
らくく 若らう 若らう 若らう 若らう 若らう 若らう





梅子せうらふひ一まも心をなげだ 孫坊とくま 火鉢の  
際梅里の心をなげらうね 君の目撃ハさうふくまきだも  
あうけく刀入ぬる

さて梅里の連くまう一 娘をのりまう者をもろめふ  
元来女ふゆいけく 梶原家の書信書場忠孝の  
次男もて忠孝と名を呼れ山田性を勤めく今年  
十六才まう一が今梶原家の屋とり六平次郎候と  
いふらうくむまうね 生受ゆく兄上源太殿を去る

よう章のの家智とまうまう 孫坊 揚長とまう  
ふゆのもまうけいんごん源太どのの忠孝妻ふゆいんと  
つね そのまき 梶原もまうとらうまう  
ふゆいん 源太どのの孫坊もまうらう  
つね 忠孝の忠孝ふすまう一者まう  
おのまうとまうまう 忠孝の孫坊の孫坊  
おのまうとまうまう 忠孝の孫坊の孫坊  
かまひ一者まう 忠孝の孫坊の孫坊















Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be in a different language or dialect than the surrounding text. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge.

Small handwritten text or signature at the bottom of the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing the narrative or record from the previous page. The text is dense and difficult to decipher without specialized knowledge.



